Osaka University Knowledge Archive

Title	Learning Fertility Knowledge and Making Informed Reproductive Life Plan
Author(s)	足立, 朋子
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/82119
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　足立　朋子　　）	
論文題名	Learning Fertility Knowledge and Making Informed Reproductive Life Plan (妊孕性知識の習得とリプロダクティブ・ライフプラン)

【背景】近年、晩産化が進むなか年齢による妊孕性の低下について知識をもった上でリプロダクティブ・ライフプランを立てることが推奨されている。日本では、2015年の少子化社会対策大綱のなかで妊孕性知識の教育に取り組むことが明記され、思春期からの教育が求められている。しかし、教育現場の状況や妊孕性知識を習得する意義は明確ではない。そこで、本研究では妊孕性知識の教育を学校教育へ導入することを目指し、中学校教員の妊孕性知識の現状と不妊治療中の男女の意見を通して、妊孕性知識を習得する意義について検討した。

【研究1】中学校教員の妊孕性知識量と妊孕性教育に対する負担感

目的：中学校教員の妊孕性知識量と妊孕性教育の負担感を明らかにする

方法：大阪府下の公立中学校6校の教員を対象に自記式無記名質問紙調査を行い、有効回答125部を分析対象とした。妊孕性知識量と妊孕性知識の教育に対する負担感との関連については、「負担あり群」と「負担なし群」に分け、カーディフ妊孕性知識尺度（CFKS-J）の平均正解項目数を対応のないt検定で比較した。

結果：CFKS-Jの平均正解率は57.7%であり、国が目標としている正解率70%より低かった。妊孕性教育に対する負担感を感じる教員の正解項目数は、負担感を感じない教員より有意に低かった（8.1±2.6 vs 6.8±3.0, p=0.016）。

【研究2】妊孕性知識が不足した状態での意思決定と妊娠の計画時期の遅れに対する後悔

目的：妊娠の計画時期が遅れたことに対する後悔と遅れた理由との関連を明らかにする

方法：全国の特定治療支援事業の指定医療機関9施設に通院するカップルを対象に自記式無記名質問紙調査を行い、子どものいない男女388名の回答を分析対象とした。妊娠の計画時期が遅れたことに対する後悔は7段階で尋ね、遅れた理由は先行研究をもとに8項目を提示し、各項目が当てはまるかどうか7段階で尋ねた。後悔と理由の関連の分析には重回帰分析を用いた。

結果：妊娠の計画時期が遅れた理由のなかで後悔と関連がみられた理由は、女性では「妊孕性知識の不足」（β=0.232、95% CI=0.075 to 0.318、p=0.002）、男性では「妊孕性知識の不足」（β=0.238、95% CI=0.083 to 0.371、p=0.002）と「健康問題」（β= 0.196; 95% CI=0.039 to 0.332、p=0.013）であった。

【研究3】妊娠の計画時期の遅れに対する後悔と人生満足度の関連

目的：妊娠の計画時期が遅れたことに対する後悔と人生満足度の関連を明らかにする

方法：全国の特定治療支援事業の指定医療機関9施設に通院するカップルを対象に自記式無記名質問紙調査を行い、男女449名の回答を分析対象とした。人生満足度の測定にはSatisfaction With Life Scale (SWLS)を使用し、妊娠を計画する時期の遅れに対する後悔は7段階で尋ねた。後悔と人生満足度との関連の分析には重回帰分析を用いた。

結果：女性では、妊娠の計画時期が遅れたことに対する後悔は人生満足度と負の関連があった（β=-0.155、95% CI=-0.938 to -0.093、p=0.017）。男性では、これらの因子と人生満足度に有意な関連はなかった。

【総括】

妊孕性知識をもってリプロダクティブ・ライフプランを立てることが、後悔のないリプロダクティブ・ライフ、満足のいく人生につながる可能性が示唆された。学校教育のなかで妊孕性知識を伝えていけるように、医療者と教員が協働する必要がある。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　　足立　朋子　　）		
論文審査担当者	（職）	氏　　名
	主 査　　教授	遠藤　誠之
	副 査　　教授	渡邊　浩子
	副 査　　教授	松﨑　政代

論文審査の結果の要旨

近年、晩産化が進むなか年齢による妊孕性の低下について知識をもった上でリプロダクティブ・ライフプランを立てることが推奨されている。思春期からの教育が求められているが、教育現場の状況や教育現場に伝えられる妊孕性知識を習得する意義は明確ではない。そこで、本研究では妊孕性知識の学校教育への導入を目指し、教員の現状と妊孕性知識を習得する意義について検討した。

研究１では、大阪府下の公立中学校教員の妊孕性知識量と妊孕性教育の負担感を明らかにした。有効回答125部を分析対象とした。13項目で構成されるカーディフ妊孕性知識尺度の平均正解率は57.7%であり、国が目標としている正解率70%より低かった。また、妊孕性教育に対する負担感を感じる教員の妊孕性知識の正解項目数は、負担感を感じない教員より有意に低かった（8.1±2.6 vs 6.8±3.0, p=0.016)。

研究２では、不妊治療中の男女を対象に自記式無記名質問紙調査を行い、妊娠の計画時期が遅れたことに対する後悔と遅れた理由との関連を明らかにした。子どものいない男女388名の回答を分析対象とした。妊娠の計画時期が遅れたことに対する後悔は7件法で尋ね、遅れた理由は先行研究をもとに8項目を提示し、各項目が当てはまるかどうか7件法で尋ねた。妊娠の計画時期が遅れた理由のなかで後悔と関連がみられた理由は、女性では「妊孕性知識の不足」（β= 0.232、95%CI = 0.075-0.318、p = 0.002)、男性では「妊孕性知識の不足」（β= 0.238、95%CI I = 0.083-0.371、p = 0.002）と「健康問題」（β= 0.196; 95%CI = 0.039-0.332、p = 0.013）であった。

研究３では、不妊治療中の男女を対象に自記式無記名質問紙調査を行い、妊娠の計画時期が遅れたことに対する後悔と人生満足度の関連を明らかにした。男女449名の回答を分析対象とした。人生満足度の測定にはSatisfaction With Life Scale (SWLS)を使用し、妊娠を計画する時期の遅れに対する後悔は7件法で尋ねた。女性では、後悔と人生満足度に負の関連があった(β= -0.155、95%CI I = -0.938 - -0.093、p = 0.017)。男性では、後悔と人生満足度に有意な関連はなかった。

本研究では、妊孕性知識をもってリプロダクティブ・ライフプランを立てることが、後悔のないリプロダクティブ・ライフ、満足のいく人生につながる可能性が示唆された。本論文は次世代の若者が現在不妊治療を必要としている男女の経験から学ぶことで、よりよいリプロダクティブ・ライフ実現の可能性を示唆しており、リプロダクティブ・ライフプランを基盤とした将来の妊娠・出産を見据えた思春期教育の発展に寄与すると考えられる。

以上により、本論文は博士（保健学）の学位を授与するに値するものと考える。